

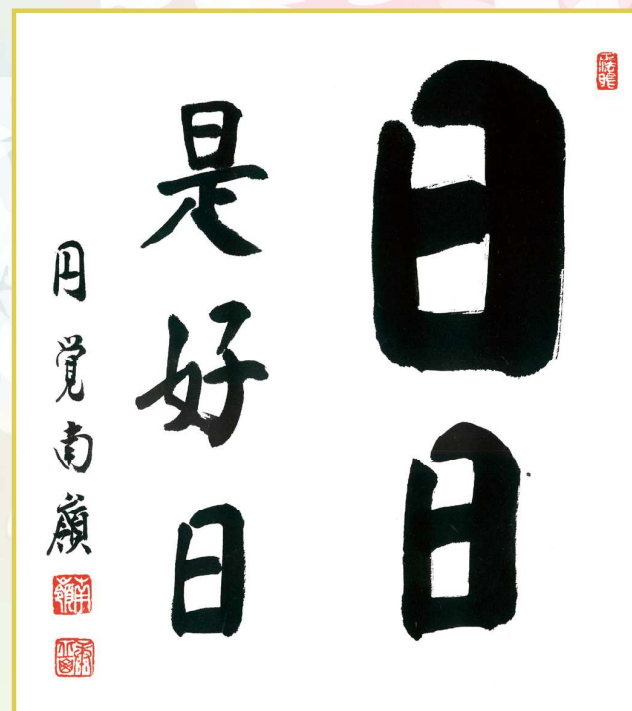
日日是好日

「日日是好日」という禅の言葉があります。一般にもよく知られた禅語であります。『広辞苑』には「にちにちこれこうじつ」として、「碧巖録」毎日毎日が平和なよい日であること。」と解説されています。

『広辞苑』では「にちにちこれこうじつ」と読まれています。が、円覚寺では先代の管長足立大進老師が「にちにちこれこうにち」と読んでおられましたので、「こうにち」と読み慣わしています。朝比奈宗源老師訳注の

岩波文庫旧版『碧巖録』にも「にちにちこれこうにち」とルビがふられています。足立老師は朝比奈老師の読み方を踏襲されているのだと察します。

雲門文偃禅師という方の言葉であります。雲門禅師は、西暦八六四年の生まれで九四九年にお亡くなりになっています。幼少の頃より出家することを望んでいて、一七歳で出家します。二〇歳の時具足戒を受け、四分律等を学ばれました。その後、黄檗



円覚349号 目次

横田管長のお話

「日日是好日」	1
管長のページ	8
信心ことはじめ④⑧	10
明治居士列伝⑥/ 蓮沼 直應	12
春の冷え対策/ 桜井 竜生	16
円覚寺の至宝⑭	20
精進料理レシピ/ 藤川 譲治	22
お墓って何?〜大切な人と手をつなぐ〜/ 横山友宏・由馨	24

表紙・裏表紙写真 / 円覚寺派宗務本所

希運の法嗣の睦州禪師について参拝しました。さらに雪峰義存禪師に参じてその法を嗣がれています。九二三年に雲門山に禅寺を建立し、常時千人の大衆が集まっていたというのであります。

『碧巖録』には次の問答が書かれています。

そんな雲門禪師がある日、修行僧達に問いました。「十五日以前の事はしばらくおくとして、十五日以後、どのような心境で送るのか、一句を持ってこい」という問いです。その日がちょうど十五日だったのかもしれない。

要するに、もう過ぎた日のことは問うまい、これからの一日一日をどう過ごすつもりであるかを問うたのです。残念ながら修行僧達に答えられる者はいませんでした。そこで雲門禪師は自ら「日日是好日」と答

えられたのでした。

この一言は、今日でも茶席などでもよく用いられています。しかしどの日もどの日も、よい日であるといつても、決して自分にとって都合のよい日ばかりではありません。

江戸時代に「年中三月常月夜 女房二十^{はたち}で年とらず 死なぬ子三人みな孝行 使えど減らぬ金十両 死んでも命のあるように」という歌があります。三月というのは今の四月頃で、暑くもなく寒くもなく花の咲くよき気候です。しかもいつも月夜。いいことづくめであるように願いはすれども、そうはうまくゆかないのがお互いの人生です。

思えば昨年の元旦に能登地方を大地震が襲いました。なんとか復旧復興に向けて頑張っていたところ、九月には大雨でさらに災

害となったのでした。今なお不自由な暮らしをなさっている方が多いということです。いったい、なにがよい日だといえるのでしょうか。

京都の花園大学には毎月授業があつて参ります。京都市内にはたくさんのお寺がございます。お寺にはよく掲示板があつて、なにかの言葉が書かれていることが多いのです。いつも拝見するのが楽しみです。あるお寺の掲示板に「子どもの頃 すべてが新鮮で まぶしかった 大人になると 色あせてしまう 今日という日は人生で初めての日だというのに」という言葉をみつけてハッとしました。

『わたしの出会った大切なひと言』(クレスト社)にこんな言葉があります。「私が無駄





に過ごした今日は、昨日死んだ人が痛切に生きたいと思った一日である」という言葉です。

森信三先生は「人生二度なし」とよく仰せになっています。また森先生は「これの世の再び無しといふことを 命に透り知る人すくな」と詠われています。今日という一日もまた再び無いものだと、誰もが理論としては分かっているでしょうが、身にしみて感じている人は稀だということです。

『碧巖録』にはその「日日是れ好日」という雲門禅師の言葉に、圓悟禅師が「誰が家にか明月清風無からん」という一語を著けられています。「どの家にも明月清風があるものだ」という意味です。

またさらに「海神貴きを知って価を知らず」という語も添えられています。「海の神さま

は珊瑚の貴重なことを知っていてもその真の価まではご存じない」という意味です。

どんな家であろうとも、たとえどんな境遇にあっても、明月を眺めることはできるし、清らかな風を全身で感じることはできるといふことです。

そんなすばらしい世界の中にありながら、その本当の貴さに気がついていない人は稀であるというのであります。お互い、ほんの少しばかり自分も思うに任せぬことがあれば、それだけで全てが嫌になったりしてしまします。

落ち込んだりもします。しかしそんな時でも、夜空には明月が輝き、外には清風が吹き渡っているものです。

坂村真民先生に「時」という詩があります。



時

日の昇るにも
手を合わさず
月の沈むにも
心ひかれず
あくせくとして
一世を終えし人の
いかに多きことぞ
道のべに花咲けど見ず
梢に鳥鳴けど聞かず
せかせかとして
過ぎゆく人の
いかに多きことぞ
二度とないこの人生を
いかに生き
いかに死するか
耳かたむけることもなく

い日であることを感じたいものであります。
私たちの修行は坐禅をすることが主であります。坐禅をしている間は、ただ呼吸を見つめています。呼吸といっても、見つめることのできるのは、今の呼吸だけです。過去の呼吸はもう体験できませんし、未来の呼吸もまだであります。それも一呼吸一呼吸、今している呼吸は一生に一度きりの呼吸な

うかうかとして

老いたる人の
いかに多きことぞ
川の流れにも
風の音にも
告げ給う声のあることを
知ろうともせず
金に名譽に地位に
狂奔し終わる人の
いかに多きことぞ
生死事大無常迅速
時人^{ああ}を待たず
噫

日の昇るのに手を合わせ、月の沈むのに心ひかれ、道のべの花咲けば見つめ、梢に鳥鳴けば聞き入って毎日毎日がかけがえのな

のです。

一日一日も同じであります。かけがえのない一日が現れて、もう二度と帰ってはきません。明日の予定を考えることは必要でしょうが、あまり明日のことを思い煩わしいことです。老いと病いと死は誰しも避けることができません。いつまでも若く健康でと願ってもかなわないのが人生です。一日一日と老いてゆくのが事実であります。しかし、今日という日は人生で初めての日です。江戸期の禅僧正受老人は、今日一日が自分の一生だと思つて暮らせと説かれました。

朝目が覚めたら、今日一日限りの命と思つて精一杯生きるのです。そんな日日こそ「日日是れ好日」と受け止めることができます。